

# 序

学生時代、検査値自体を学ぶ授業はなく、ましてや検査値からリハへどう活かすかについて学ぶ機会は少なかった。卒業後、実際に臨床現場にでて内部障害とかかわるようになってからは、検査値のとらえ方について上司に繰り返し鍛えられたことを記憶している。

リスク管理と称して行われる評価はいわゆるバイタルサイン（血圧、脈拍）だけではない。血液検査などの客観的データから病態のアセスメントを日々行い、実際に目の前の患者さんを診て、触ってフィジカルアセスメントを駆使することがリハスタッフには問われている。

検査値は内部障害分野においてのみ活用されるという認識が強いと思われているが、実際にはあらゆる分野で必要となることが多い。本書は内部障害以外の疾患まで手広く網羅しているため、執筆者の先生方には急性期～在宅現場のあらゆる場面で利用できるよう、リハスタッフが検査値の何を確認し、どう対処するかについて執筆していただいた。

第1章でリハに必要な各検査値、第2章で疾患別に注意すべき検査値からリハプログラムの構築、第3章のCase Studyでは実際の検査結果からQ & A方式で読者に考えてもらうよう構成した。

本書の目的は日々の臨床において検査結果から異常値に気づけることである。そして、異常値に気づいたときにリハを介入してよいのか、リハのプログラムを変更すべきかなどを判断し、時には医師や看護師と検査結果を共通言語にして相談できるようにすることが重要である。

疾患によっては血液（尿）検査のなかの1つの項目だけで病態の異常を判断できることもあれば、複数の結果を統合して判断しなければならないこともある。そのため、担当している目の前の患者の検査結果と本書を照らし合わせてみてほしい。実際に今起きている病態や現象（症状）とつじつまが合うのかを日々繰り返し確認することで驚くように臨床能力がついてくると思っている。

本書がスペシャリスト+ジェネラリストをめざすあらゆるリハスタッフの一助となることを願っている。

最後に、本書を作成するにあたり共同編集者を快く引き受けてくださった松田雅弘先生，日々の忙しい臨床・研究業務のなかでわかりやすく執筆してくださった先生方，編集部の鈴木美奈子様，大家有紀子様ならびに本書にたずさわったすべての方のご家族にもこの場を借りて感謝申し上げます。

2018年3月

編者を代表して  
田屋雅信